

地域とパートナーシップを組みより良い社会の創造をめざす

甲南女子大学

甲南女子大学は、「大学と地域が相互に学びあい、よりよい社会を創造する」というコンセプトに基づき、2009年に「対外協力センター」を設置した。大学と社会との懸け橋となる同センターでは、教職員や学生がさまざまな形でかかわる地域貢献のプロジェクトを展開している。地域が大学を育て、大学が地域を豊かにするという関係が築かれつつある。

創立90周年を機に見直された教育理念

1920年、甲南高等女学校として神戸に誕生した甲南女子大学。創立当初から「自学創造」を謳い、自己実現と社会貢献を目標とする女子教育を行ってきた。その歴史の上に立ち、現代に即した新たな教育理念が検討されたのは、創立90周年を目前にしていたときだ。

もともと甲南女子大学には「清く、正しく、優しく、強く」という校訓がある。これを生かしつつ現代の学生にもわかりやすい具体的なメッセージをと、打ち出したのが、「品格と国際性を備え、社会に貢献する高い志を持つ女性を育成する」という教育理念だった。

その理念のもとに生まれたのが、「社会貢献室」と「国際交流室」から成る「対外協力センター」である。センターのウェブサイトには、次のようなコンセプトが掲げられている。「大学と地域が相互の主体性を認めながら、知的資源の還元、地域の生活環境整備、コミュニティの活性化、QOL向

上、教育支援などの分野で協働し、相互に学びあい、自立した主体としてよりよい社会を創造してゆく」。

大学と地域とがそれぞれの資産を提供し合いながら、共に成長するという「共創のパートナーシップ」をめざすと明言している。

「本学では従来、いろいろな部署や学部で社会貢献が行われてきた。地域をはじめ外部の人とネットワークを持ち、ユニークな活動をしてきた教員も

たくさんいる。しかし、縦割り組織のため、今まではバラバラに活動が行われていた。そういった活動を集約し、窓口を一つにしようというねらいがあった」と対外協力センター長の谷川冬二教授は言う。

外部から入ってくる情報と外部に出ていく情報を1か所に集めたことで、学内全体の動きがよく見えるようになり、連携もスムーズになった。大学が丸丸となって社会貢献に取り組む体制

図表1 ケアの領域と課題

3つの領域	7つの課題
多様な人のありかたへのケア	健康と福祉のケア
	子どもケア
	人の多様性ケア
地域社会の発展へのケア	地域生活ケア
地球社会の課題へのケア	地域文化ケア
	低炭素社会ケア
	地域社会ケア

図表2 甲南女子大学の学部・学科構成

学部	学科
看護リハビリテーション学部	看護学科
	理学療法学科
	日本語日文化学科
文学部	英語文化学科 ※2012年4月学科名称変更
	多文化コミュニケーション学科
	メディア表現学科
	心理学科
人間科学部	総合子ども学科
	文化社会学科
	生活環境学科

が整ったのだ。

教育資源を総動員する多彩なプロジェクト

対外協力センター・社会貢献室では、社会貢献活動を「市民社会をつくりあげ持続可能な高いQOLを保証する総合的な人間実践」という観点から、「ケア活動」と呼んでいる。活動分野を「3つの領域・7つの課題」に整理し、40以上のプロジェクトを推進している。

「多様な人のありかたへのケア」は、年齢、国籍、文化など、人々の多様性を尊重し合いながら暮らせる豊かな社会をめざすという基本理念を掲げる。「地域社会の発展へのケア」は、暮らしに直結するまちづくり、環境整備、文化活動に取り組む。「地球社会の課題へのケア」は、保健衛生、貧困、温暖化など、地球規模の課題の解決をめざすケアを実践している。

活動分野は、甲南女子大学の学部・学科の専門分野と重なる部分が多く、大学が持つ教育・研究の資産を総動員して社会に還元しようという姿勢が読み取れる。多くの教員が、それぞれの専門分野を生かして地域で実践してきた活動を、センターに集約した結果といえるだろう。

プロジェクトの主体・スタイルは、社会貢献室内のボランティアセンターによるコーディネート、大学や学部・学科による主催・企画、学生による企画・運営、大学が地域と連携する取り組みなど、多彩だ。学生と教職員がさまざまな形でかかわり、体制面においても教育資源の総動員といえる。

心理相談研究センターでは、教員やカウンセラー、臨床心理学コースの大学院生が、地域住民を対象に心理相談や発達相談を実施。キャンパス内に設



地元の小学生を招待して実施したキャンパス探検ツアー(左)、岡本一斉クリーン作戦(右)。

置した子育て支援施設には、保育士が常駐するほか、小児科医の教員が児童虐待防止の専門知識を生かしたアドバイスもする。

学生は、学びの中で芽生えた問題意識を行動に移し、自分たちにできる解決方法を探っている。インドネシア語を学ぶグループは、不要になった絵本を集めてインドネシア語の翻訳をつけて同国の学校や図書館に寄贈する活動を展開。韓国人学生との相互理解を深めるためのホームステイプログラムの企画・実施も、学生主体のプロジェクトだ。

甲南女子大学、甲南女子中学校・高校の学生・生徒および同窓会、教職員が、募金活動によってバングラデシュでの学校建設を支援する「オール甲南女子」の取り組みもある。

ボランティアセンターがコーディネートする活動は、学生にとっての教育効果を重視。マナーやルールの順守を徹底させ、活動後のレポート提出を義務付けている。120分のボランティア活動を15回行うと1単位を認定。卒業要件には算入されないが、成績証明書に記載される。

「センターが事前、事後にサポートすることで学生が成長し、地域からも喜ばれるようになった。近隣との人間関係を築くことで、社会人としての力もついてきているようだ」とボランティアセンター担当の尹梨香氏は言

う。

社会貢献日本一の大学をめざして

社会貢献活動によって、学生や教職員と地域住民との対話の機会が増えている。「地域に学生を育てていただいているので、地域貢献という形で恩返しをしていきたい」と谷川教授。

センター設立3年目にして、「学生が良くなってきた」「甲南女子の学生にボランティアをお願いしたい」という地域の声も少しずつ大学に届くようになってきた。

「『共に学ぶ』という姿勢が学生にも地域にも浸透してきた。意識としては『社会貢献日本一の女子大』をめざしたい」と、事務長代理の何里美氏。

こうした考えを積極的に発信するため、社会貢献室のスタッフやボランティア活動に取り組む学生による公式ブログも開設している。

「甲南女子大学は、主に地元から学生を集めている。だから、地元で評価が上がり、高校生や高校教員、保護者に好感を持ってもらうことがとても大事。いい学生が多い良い大学という評判が口コミで近隣の府県にも広がっていけば、なお喜ばしい。だからこそ、大学と地域をつなぐ懸け橋となり、相互に学びあい、共に発展する強固な関係を築きたい」と谷川教授は言う。